

係に障害を持っており、健常な児童に比べてストレスを受けやすいと考えられた。これらの点に注目して患児のストレスの開放に努めると共に、主に両親を通じて家族内の緊張関係を緩和するよう働きかけた所、患児のチックは軽快し、学業や対人関係、生活全般にわたって改善が見られた。トゥレット障害は器質因を基礎にその症状の発達や程度、経過には心理環境因が関与していると考えられるが、今回のように薬物を用いずに心理環境因の整理や改善だけでも劇的にチックが改善する症例がある事はトゥレット障害の治療において心理環境的アプローチも一考の余地があると考えここに報告した。

15) 母親に身体接触を求める分裂病患者について

田村 絹代 (五日町病院)
田辺 洋之 (長岡赤十字病院
精神科)
茂野 良一・伊藤 陽 (新潟大学
精神医学教室)

精神分裂病患者の中で、その経過中、特に母親に対して身体接触を求める者に遭遇することがある。今回我々はそのような行動が認められた9例の患者について、その臨床的特徴を明らかにし、身体接触行動の意味とそれを治療に生かす道を探ってみようとした。

〈結果〉 1) 9例中男性が6名、女性が3名で、発症年齢は1例を除いて17才～21才の間に分布していた(初診時年齢も同様)。男性の方が多いという結果については、男性患者が異性である母親に身体接触を試みた場合、母親自身がそれを受容し難く、問題行動としてとらえやすいためとも考えられる。

2) 病型は、破瓜型もしくは破瓜型近縁の病型が6名、妄想型が2名、分類困難型が1名であった。

3) 父親の特徴は、患者のことに無関心、厳しい、無口などの傾向が認められた。一方母親には、不安耐性が低いタイプと、明るくのんきで楽天的なタイプとが見られたが、とりつくしまもなく冷淡で拒絶的という母親ではないという点で共通しており、その意味で、患者にとって多少は情緒の通じる、受容の可能性のある相手であり、そのため身体接触行動が現れやすいのではないかと推察される。

4) 身体接触行動が現れる時期は、9例全例で、急性期の異常体験や興奮、緊張病性昏迷などが消褪した後の無為自閉的な時期(3カ月～2年半)であった。これは、身体接触が「精神病後疲弊期」に見られた、という永田らの報告と一致している。また症例の中には、母親への

身体接触行動が軽減・消失する過程で、井上らの報告に見られるような移行対象(猫など)が出現したり、大森らの云う「おどけ」の行動を示した症例もあった。

5) この時期の薬物治療として、9例中4例で、クロルプロマジンが身体接触行動に対しては比較的有効であった。その理由としては、急性期を過ぎたこの時期には、切れ味の鋭い薬剤よりも、むしろマイルドな鎮静がクロルプロマジンによって得られるのではないかと考える。

6) 治療的対応としては、分裂病患者の示す身体接触行動が、治療過程において重要であるというこれまでの諸研究(永田ら、大森ら、飛鳥井ら)を踏まえ、治療者が母親をサポートし、その行動をむげにはねつけず受容して行くよう、母親に促していくことが必要であろう。それはすなわち、身体接触による十分な保護や依存の充足が、傷ついた自我の再構成へと向かわせる、「育て直し」の意味を持っていると考えるからである。

〈まとめ〉 以上述べた臨床像が、身体接触行動の見られる患者に特異的なものなのかどうか、また仮説的に考察した点が妥当なものであるのかどうかについては、同様の症例をさらに集めて検討を重ねると共に、他のタイプの身体接触を示す患者や、身体接触行動を起こさない分裂病患者との比較検討が今後必要であろう。

16) デイケア10周年を振り返って —その活動報告と今後の課題—

滝浪 文子 (悠久荘精神科ソー
シャルワーカー)

はじめに：当院のDCは昭和57年9月に開始され昭和58年8月厚生省より精神科デイケアとして認可された。平成4年8月、10周年目に入り、それを記念し10月26日無事10周年記念行事を取り行い事が出来た。記念講演、昼食パーティー、シンポジウムと盛り沢山の内容をメンバーとスタッフが一緒になって取り組む事が出来たのは、長い10年という年月活動の積み重ねによるものだと思う。

今ここで10年目に入ってその活動内容を振り返り、その果たしてきた役割、問題点、今後の課題、そしてこれからの活動の進め方について考えてみたい。

活動の流れ：4～5人で始めたDCも10年目に入った現在では登録数59名にのぼり、毎日の参加者数は40名と増加している。退院後の受け皿、やすらぎの場、いこいの場、再発防止としての役割を担い、多くのメンバー・スタッフのかかわりの中で今日に至っている。

平成3年9月には増えてきたメンバーの中、参加の目的、ニーズ、年齢差の違いを考え、思い切ったプログラ

ム変更が行われた。スタッフもメンバーの一員として一緒に DC の問題を考えていこうという趣旨の下、平成 2 年 3 月より合同運営会議が 3 カ月に 1 回開始された。又、DC の活動内容、実践を多くの家族に知って貰おうとメンバーの声を盛り込みながら DC 通信を発行している。平成 4 年 3 月より病期の理解を深め、家族がもっと病院に近づき、家族同志の交流を深めるという目的で念願だった家族の集いを開く事が出来た。ケースを紹介しながら、今後どのように DC を進めていったら良いのか、DC の担う役割、期待されるもの、地域とのつながり等考えながらメンバー、家族と共に歩んでいきたい。

まとめ：登録外の人も含めると 60 数名のメンバーが通中、発足当初より参加の仕方、目的、ニーズ等随分多様化してきた。どのようにしたら自主性を尊重しつつやすらぎの場を保証し、生き生きとした DC に出来るか。試行錯誤しながらメンバー・スタッフ共々頑張っているのが現状である。

就職だけでなく社会で生きること、それも 1 つの社会復帰といえる。私達は多様化されてきているメンバーのニーズを受け入れ、その人のペースで病状、情緒安定を図り安定したゆとりある社会生活が出来る事を願っている。そしてより多くの人の参加を望んでいる。

することを患者さんに慣れて貰います。また病院外の患者さんや家族との交流を促進するようにします。

つまり、やや理念的ですが、地域に近づくことと、自由の拡大・主体性回復の享受へのささやかな一歩と言えるでしょうか。

また、地域に復帰するための訓練として、或いは退院後の抛り所・居場所としてデイケア・院内有給作業の準備・開設があります。

訪問看護では、患者の病状や生活障害の程度・家族状況などを把握し、生活支援・精神的支援・家族支援などを目指します。

障害者年金や生活保護の受給、保健所の訪問指導・デイケア、作業所への通所など、出来るだけ社会資源の活用を計ります。

以上のような活動によって、“院内寛解”、つまり疾患そのものより、その疾患からくる生活障害および社会的ハンディキャップなどによって病院生活を余儀なくされている人たちの幾分かを地域に戻し、そこで安心して生活できるように、ある程度なったかと思えます。

第 235 回新潟外科集談会

日 時 1992 年 12 月 5 日 (土)

午後 1 時

会 場 新潟大学医学部第 3 講義室

17) 中条病院精神科の社会復帰在宅ケア支援システム

—退院のさせ方、支え方—

山下 正広・須賀 良一 (厚生連中条病院)
滝沢 恭二 (精神科)

いわゆる院内寛解の患者さん達を、どのようにしたら地域に戻すことができるか、地域に戻した後はどのように支え再発を予防するか。それも出来る限り家族への負担を少なくして、というのが私たちの課題でした。

そして、その解決を工夫する過程で一つのシステムが生み出されました。

まず、病院家族会での活動があります。家族の希望・不安を汲み上げるようにします。また病気の理解を深めるための学習会を開いたり、地域医療の現状や病院の取り組みを説明します。特に、家族になるべく負担をかけない、再入院にならないように出来るだけのことをする、緊急時はすぐに対応する、を繰り返します。

病棟内では、出来る限りの“地域に開かれた病棟づくり”を志します。鍵を外すことを前提として、お金・時間の使い方、薬の内服、日々の行動を自分で管理・決定

1) 臍体尾部欠損症に胆石症を合併した 1 例

河内 保之・岡村 直孝
羽賀 学・若桑 隆二
広田 雅行・田島 健三 (長岡赤十字病院)
和田 寛治 (外科)

臍体尾部欠損症は希な疾患であり、本邦では 1991 年までに 74 例の報告がある。今回、我々は本症に胆石症を合併し、手術によりこれを確認した症例を経験したので報告する。

症例は 47 歳の男性で、1990 年胆嚢炎および膵炎を契機に CT で臍体尾部欠損症を指摘された。1992 年 4 月再び膵炎および胆石症で入院した。ERCP では膵管は滑らかに途絶しており、副膵管及び副乳頭は認めなかった。アルギニン負荷試験および 75 g OGTT では、インスリン分泌は基礎値、反応ともに低かった。胆石症に対しての手術時の所見では、臍体尾部には脂肪組織が存